特集 モンゴル：環境立国の行方

座談会

# モンゴルからさぐる地球の未来

一度訪れた人を惹きつけてやまないモンゴル．モンゴルの魅力と，環境の持続には，どんなつながりがあるのでしょうか．研究者の目にうつるモンゴルの姿，そしてモンゴルの草原とそこでの暮らしを維持しようという努力の中に，その答えがあります．日本は，地球は，モンゴルから何を学び，どう変わらなければならないのでしょうか．

司会：小長谷有紀　松原正毅　原山　煌　日高敏隆　安成哲三

こながや　ゆき
国立民族学博物館（文化人類学）

まつばら　まさたけ
国立民族学博物館（社会人類学，遊牧社会論）

はらやま　あきら
桃山学院大学（東洋史）

ひだか　としたか
文部科学省総合地球環境学研究所所長（動物行動学）

やすなり　てつぞう
名古屋大学地球水循環研究センター（気候学）

小長谷――今回の特集は，総合地球環境学研究所の創立1周年記念のシンポジウムで，安成先生とお会いしたのがきっかけでしたね．『科学』に「現場で語る地球の環境」というシリーズがあるから，現地で一度集まりませんかと，理科系の安成先生が文科系の私に声をかけてくださった．ちょうど私も理科系のモンゴル研究をまとめて聞きたいと思っていたところでした．それで，皆さんがウランバートルへ調査に行く夏にフォーラムをしようと．だいぶ頑張って日程の調整を試みましたが，1日違いで出たり入ったりしていて無理だったんです．

結局日本で進めることになりましたが，米本昌平先生が，単純に学問として人文と理系が交流するだけでなく，実践の場でどう生かすかを積極的に考えておられることも意識して，特集には駐日モンゴル国大使へのインタビューを入れました．大使のご専門は気象学で，研究と実務両方のご経験があり，安成先生とも懇意にされています．また論文でも，市場経済に反対する立場だけでなく，もう少し積極的に市場経済と正しくつながる方法を見つけて，環境を保持しながら経済の仕組みを変えようという試みもあります．それを前提に，今日は皆さんにお話しいただきたいと思います．

## モンゴルとの関係

小長谷――そもそも皆さんのモンゴルとのかかわりをお話し願えますか？

安成――かれこれ10年程前，米本さんたちとモンゴルの山に登りたいと，学術調査隊で行ったのがきっかけです．その頃は登山だけでは難しかったんです．

しかし，行くからには色々と調べたい．私は気象学・気候学が専門ですが，ご存知のように地球温暖化が進行していて，その大きな気温上昇の中心の1つがシベリアからモンゴルだといわれています．特に冬，いったい何が起こっているのか見たかった．

もう1つ，アジアモンスーンに関心を持ってずっと研究しているんですが，植生や地表面の色々な状態と気候がどういう関わりをもっているのか．古典的に

は，ケッペンの気候学のように，気候によって植生が決まるとなっている．モンゴルは乾燥気候で草原となっているわけですが，そんな単純なものかなと．実際に現地へ行き出して，よけいにそう思ったのです．モンゴルの草原生態系をみると，気候環境だけで成り立っているわけでは決してなく，家畜の存在が非常に大きな役割を果たしている．百葉箱などの測器を置いて，家畜が入らないように柵を作ったら，柵の中だけ草がボウボウ生えて，全く違う環境になりました．つまり草原生態系では，家畜はかなり能動的な役割を果たしているのではないかと．

草原の状態と，大気，水循環も含めた色々な熱のやり取りは，いまの生態系が規定している部分もあるのではないか．そういう生態学と気候学・気象学の新しい接点は非常に面白い．これには遊牧という人間生活も絡んでいる．現地では，特にこの間のモンゴルの民主化などの社会・政治情勢の変化で，俗にいえば，生態系破壊的なことを相当やっている．モンゴルは，地球環境を考える上で色々な問題を含んでいると……．

もう1つモンゴルへ行ってみたかった理由は，環境立国でやっていこうという姿勢が強いことです．今の駐日大使もそういうお考えですね．これは，今後の地球環境を考える上で重要な問題を含んでいる．それを解く鍵は，政府・社会・行政的側面と，気候・生態系などわれわれがやっている純粋な自然科学的側面がつながって出てくるのではないか．環境問題を考える色々な面があるという気がして，今日に至っています．

**小長谷**——今日のお題が全部出ましたね(笑)．

**松原**——私の場合，直接的なモンゴルとのかかわりは1982年に社会主義時代のモンゴルへ行った時からです．それ以前の間接的なかかわりからお話しすると，トルコ系遊牧民の研究調査が最初のきっかけです．トルコへ最初に行ったのは72年の内戦状態の時で，調査許可を取ること自体が非常に難しく，まして遊牧民のいるトロス山脈へ行くのはほとんど不可能でした．結局つてをたどって，トロス山脈近くのアナトリア西南地域の村で調査することになりました．その村の住民の一部は，遊牧民が定住化した人たちだったのです．それからトルコ系遊牧民の中に入る調査許可を取るのに，6年かかりました．トルコの政府高官や役人の中にも色々な立場があって，自らの祖先がオグズ系の遊牧民であることを非常に誇りに思っている人もいる一方，遊牧を恥ずかしい，後れていると思っている人も多いのです．人類の生活史で遊牧は非常に重要な役割を果たしてきた，その実態を知るには自ら中に入って学ぶしかないということを，6年かかってようやく説得できて，調査許可を取ることができました．79～80年まで15カ月ぐらい，トロス山脈を中心に遊牧生活を営むユルックと呼ばれている人たちの中で暮らしました．彼らのテントに居候して，1年サイクルの遊牧，移動や家畜の管理など，色々学んだわけです．

そのフィールドを経てますます思うようになったのは，遊牧という人間の生き方が，環境問題と非常に密接なかかわりをもつということです．農耕は，始めた途端，自然を破壊しなければならない．森林を切り拓いたり，土地を耕したりします．遊牧生活は自然を全く加工しません．動物の群と一緒に動いていく．こういう生活は，当然ながら近代国家ができたとき，地球のあらゆる所で非常な衝突，摩擦を起こし，抹殺される方向に動いていった．トルコの遊牧民の中で暮らしていたときも，それをひしひしと感じましたし，近現代史で中央アジア，モンゴルで進められたことは，いわば社会主義体制国での遊牧の絶滅政策だったのです．

トルコの遊牧民も非常に苦しい状況で遊牧を持続していました．遊牧生活は，見た目はのんびりしているようでも，実際はかなり厳しい．自然と直面して暮らしていかなければならない．「こんな苦しい状況でなぜ遊牧を続けるのか」と質問して回ったんですが，答えはほとんど皆同じ，「自由に生きるためだ」というのです．日本語に訳すと非常に狭い意味のようですが，ここで言う自由とは，生き方としての自由なんです．

私は，遊牧の起源と現在，未来を考えていくために，ユーラシア大陸で展開した遊牧を克明に跡付けてゆく必要があると思っています．現在トルコ共和国で暮らしているオグズ系の人たちのもともとのふるさとはモンゴル高原で，様々な政治的情勢を背景に，8世紀頃から西へ移動していった．80年にトルコの調査が終わってから，その歴史を逆に辿っていこうと思っていました．ちょうどその時，当時国立民族博物館館長だった梅棹忠夫さんに，ツェデンバルという議長から招待状がきました．その招待に応じて組まれた調査団に加わって行ったのが，最初のモンゴルでした．ただ当時，議長の招待状でも，どこへも自由に動けない(笑)．観光地のホジルトとか，ハラホリンしか行けなかった．どうしても行きたかったのはキュル＝テギン碑とトニュクク碑のあるところでした．これらのオルホン突厥碑文は，遊牧の歴史の中でも類い希な，自らが残した歴史記録の1つです．82年当時，特にトニュククの碑文がどんな状態かよくわからなくなっていた．トニュククはぜひ見たかったのですが，ソ連軍の

基地のすぐそばだったせいで結局行けず，キュル＝テギン碑だけは見ることができました．

その後しばらくはチベットや中央アジアを歩いて，アルタイ，天山の調査を始めました．93年に新疆から陸路でモンゴルへ入ろうとしたのですが，これは実現できず，北京から空路でウランバートルへ入った．それがモンゴル訪問の2回目です．それ以降はほぼ毎年モンゴルやモンゴルに接しているトゥバ共和国，ブリヤート・モンゴル，シベリアなどを広く歩くことができました．

私は遊牧を研究して四半世紀になりますが，始めた頃にはとても自分が生きているあいだに，チベットからアルタイ，天山，モンゴル，中央アジア，シベリアと全部を見ることは不可能だと思っていた．世界の大激動のおかげで，自分の目で見ることができ，個人的には非常に幸せだと思っています．

**日高**——僕は，モンゴルには色々な意味で非常に興味があったんだけど，行く機会はなかったんです．

**小長谷**——なぜモンゴル語をご存知なんですか．

**日高**——20代終わり頃から勤めることになった農工大に，モンゴル語の辞書を作った情松先生のお嬢さんが学生でいたんです．それで先生が来られて，話が合って色々教えてくれた．先生の辞書も買って……．

**小長谷**——とりあえず使う目的はなく勉強された．

**日高**——モンゴル語がどういう言葉か知りたかった．でもせっかく勉強したし，あそこは昆虫も色々いて，アポロチョウというきれいなウスバシロチョウの産地ですから，行きたかったけど，チャンスがなかった．

それから30年以上経って，滋賀県立大学の学長になったら，モンゴルの遊牧民を研究している小貫雅男先生と，先生が連れてきたモンゴル人のナムジムという教授がいらっしゃった．ナムジム先生に，僕が字が読めると話して，「発音も非常にいいです」と言われたり……．それで，モンゴル国立大学と滋賀県立大学で協定を結んで，仲良く一緒にやりましょうと．それが1996年です．

**小長谷**——民主化直後ですから，大学が協定を結ぶ例としてはとても早いですよね．

**日高**——大学としては一緒にやりましょう，となったんですが，滋賀県が反対した．県はモンゴルと姉妹関係を結びたかったんだけど，モンゴルがすごく熱心で，下手すると猛烈にお金がかかるというので躊躇していたんです．そこへ僕がそういう手紙を出したもんだから，「学長があまり勝手なことをやっては困る．設置者は県なんだから」とか言い出して．「いったい学長とは何なんだ」と僕も怒ったんです(笑)．

そんなことがありましたが，僕が書いて小貫先生がモンゴル語に直してくれた手紙を送ったら，協定を結びに一度モンゴルへ来てくださいと．それで，ウランバートルの国立大学へ行って協定を結びました．それから，モンゴル人の若い人が運転するトヨタのすごく立派な新しいジープで，ウランバートルから750 km，モンゴルのちょうど真ん中まで行きました．1日じゃ行き着かないくらい遠い．ずっと見ていくと，話に聞いていた草原がどういうものか，非常によくわかった．道がない．地図もない．地図のない国があるのかと感心した(笑)．途中途中で道を聞くと，指さして「あっち」というだけ．「あっち」「あっち」で，どこへ行くかと思ったけれど，結局，2日目の夜には着きました．ずいぶん人生観が変わりましたね．

**原山**——私は東洋史の出身で，本を読むことばかりやっています．モンゴルの文化史を文献から探っていきたいと思い，『元朝秘史』という面白い書物がありまして，最近，小澤重男先生の訳で岩波文庫に入ったのでご存知だと思いますが，その書物から研究を始めました．これは日本でいえば『古事記』だとよく言われる通り，歴史家からは，年代記的な正確さに欠けるという批判があります．しかし松原先生が言われた突厥碑文のように，モンゴルの人が初めて自分の考え方に基づいて自らの来し方を表現した，非常に面白い史料です．

最初は文献学的に研究していたのですが，よくよく読むと，民族誌として非常に使える部分がある．生活文化，精神文化，両面にわたって色々わかる書物だと考えるようになりました．たとえば『元朝秘史』には非常に多くの動物が出てきて，その動物の現れ方が，人間との関係性において非常に面白い．チンギス・ハンの側近で，戦闘に非常に優れた四人の将軍がいるのですが，それは「四つの犬」と呼ばれます．そして，政治的な長期的見通し，先見性が要求される側近として「四つの駿馬」と呼ばれる四人がいます．そういう象徴性，メタファーが非常に強く押し出されている記述が多々あります．

これは非常に面白いテーマで，不勉強もあっていまだにずっと引きずっています．モンゴルに限らず，トルコもそうですが，北アジアの騎馬遊牧民には自前の文献史料が極めて少なく，勢い中国に遺された書物に拠ることが多い．モンゴルは非常に広い地域をカバーしていましたから，支配地の歴史家が立派な史料を残してくれています．

そして，それまで私が何を思っていたのかと言いますと，もともと古本が好きですから，いわゆる大陸もの，山中峯太郎とか——僕はそんな年代ではないのですが(笑)——に親しんでいたのですが，そのなかでも旅行記を読んでみようと思いました．特に日本は中国を中心とする東アジア世界に対して，明治期の初めから日中戦争が終わる1945年まで，深い関係をもっていました．いまもその問題は片付いていませんけれども．その間に実に多くの旅行記が出ていて，本として公刊されたもの以外にも，軍や経済関連の文書など，たくさん残っています．そういうものが，自ずからまた1つの民族誌のような役割を果たす……当時，満蒙，支那，蒙疆などというような変な言い方があったように，日本人の視点には非常にバイアスがかかっていました．それは深く考えなければならない事ですが，それでも非常に孤立的で珍しい記述が多々あります．

もう1つ，モンゴルと深い関係を持っていた中国が，清朝の末期あたりからまさに1945年ぐらいまで，政治的に不安定で，当然，史料も非常に少ない．その点からも，この時期に日本人が残した史料が，また別の意味をもつのではないかと最近強く思っています．

この2つの観点から，いまも追いかけています．

**小長谷**——直接行って見ていらしたことは？

**原山**——小長谷さんや松原先生のように，入りびたりという状況ではありませんが(笑)，一応モンゴル高原の草原地帯，アルタイの，氷河が作ったものすごく広い谷間に展開する見事な草原とか，ジュンガルとか，フルンベイルなどに行って，どういう景色なのかひと当たり見ています．まさに，チラッと見たという程度で，ここにおいでの方々に比べたら「行った」ということにはならない程度です．

**小長谷**——チラッとでも見ておいたうえで，それがどう作られたのか，その時間を本から読んでいらっしゃるわけですね．

私がモンゴルに留学したのは1979年です．松原先生が非常に厳しかったと言われたよりも前で，それはそれは厳しかった．「女の子の行く所じゃない」と．しかしその意味があまりわからない．それがよかったので，わかっていたらたぶん行かなかった．そういう幸いに恵まれて行ったのですが，それこそ山の手前まで来たのに山に登れない，みたいな感じがありました．資本主義国から来た人に対しては40 kmという移動の制限があって，それ以上遠くは行けないんです．

私はもともと，モンゴル人が植物にどんな名前を与え，どう見ているか研究したくて，辞書から草の名前を引いて持って行ったんですが，40 kmを越えられないから，草のことを知っている人とぜんぜん出会えない．それで，モンゴル人の格好をして越えて行っちゃったんです．そしたら捕まって……(笑)．

でも，私は捕まってよかったと思っています．モンゴルのいわばKGBに詰問されて，内務省の人たちにずっとビデオで撮られて，びっくりしたけれども，その取り調べが傑作で，「アメリカを通ってきたか」とか「馬を何頭持っているか」とか，質問がとんでもなく文化に満ち満ちていたわけです．自分たちの暮らしから確かに作った質問だった．社会的にはこういう環境に置かれているけれども，もっている文化の存在を非常に面白いなと思って，ますます好きになりました．

## モンゴルの魅力

**小長谷**——安成先生が最初に研究上の魅力を言われましたが，もう少し単純なことも話していただければ……．やはり嫌な所には，足繁く行かないと思います．一番多く行っておられる松原先生はいかがですか．

**松原**——モンゴルの魅力と遊牧という生き方の魅力，私の場合は両方が重なります．最初にトルコで暮らしていた時からずっと感じていたことで，非常に象徴的な表現だけれども，遊牧は生活そのものが透明感に満ちている．生きている人間の社会ですから，争いやらややこしいこともいっぱい起こります．私もたくさんこうした争いごとを記録して，原因を聞き歩きました．しかしそれでも，遊牧生活には本当に透明感がある．自分の人生で，これこそ最高だという生き方にめぐり合えて，幸せそのものだと思っています．これが一番の基底です．

モンゴルの自然は遊牧と非常に深く結びついている．ユーラシアの中央部は，もともと遊牧をはぐくんだ場所です．モンゴルの場合は，当然ながら遊牧の生態学的な適地という理由もあるわけですが，社会主義時代を経てなお，遊牧と密接に結びついた自然があり，奇跡的にそのまま持続した形で保たれている．それが，モンゴルに人びとを惹きつける理由だと思いますね．

私は遊牧の意味を考え直すことが，人類史を考え直すことだと思っています．原山さんの話にあったように，歴史記録は定住している側から書かれた，非常に偏見に満ちたものです．違う見方があることを常に考えさせられる場がモンゴルだということですね．

特にユーラシアの歴史が大きな変わり目を迎えたときに，必ず遊牧の人々の動きが非常に大きくかかわっ

ている．その意味では，遊牧民は歴史変動のエンジン部分の役割を果たしてきたといえます．最近よく「世界システム」といわれますが，世界システムが，歴史上完全な形で成立したのは，やはりモンゴル世界帝国の時代だと思います．

**小長谷**——ユーラシアの草原の多くは，本来，遊牧という生活様式だったけれども，カザフスタンの小麦畑のように，ほとんどが農場になったわけですね．

**松原**——それはソ連社会主義70年の成果で，完全に遊牧を絶滅させたわけです．そういう傷を受けながら，かろうじて遊牧の歴史を考えることができる空間として残ったのがモンゴルとアルタイ，天山山脈の地域だと思います．それが，ずっとユーラシア中央部を歩いてきた私個人の結論です．

**小長谷**——遊牧民の暮らしの「透明感」を，別のご専門から見て，感じられたことはありますか．

**安成**——私はもともと山登りが好きで，専門は自然科学なので，単純ですが，まず，日本とは全く違う自然の魅力があります．日本と違う自然は他にもあるのに，なぜ特に魅力的か．松原さんも言われたように，その自然と共に人間が住んでいるわけですね．しかも，われわれと同じ顔をしている．農耕は，自然を変えて別の自然を作るものですが，一方モンゴルでは本当の自然の中で生活している．これも透明感に通じるのかもしれませんが，ある意味ちょっとショックです．文明社会にいると，そんなことできるの？　という感じがしないでもない．そこをごく自然体にやっている．実際には色々な問題があるんですが，とにかく僕は感銘を受けました．

**小長谷**——自分の家があるそこにまさに野生のツルがいますものね．エコツーリズムは，わざわざ囲われた所へ行って，人を排除して守られた自然を見ている．それに対して，モンゴルは，本当の意味で自然の中に生きる暮らしです．それが誰の目にもわかりやすい．

**安成**——あと，われわれのような外から来た人も，いつでも気持ちよく受け入れてくれる．僕が今でも覚えているのは，ウランバートルから150 kmぐらいのバルンハラに，最初の気象施設を建てたとき，モンゴル環境省の人と一緒に行ったんですが，遊牧民の村長さんにあたる人が，草原の中の河原でヒツジを丸焼きにしたホルホックを作って，総出で大歓迎してくれたんです．日本の田舎に昔いたような人が今そこにいる．私には感じるものがありましたね．

**小長谷**——本当に極楽のようなレストランですよね．壁にかけられた絵画ではなく，天然の風景があって．

**安成**——こんな贅沢は，ちょっとほかにないなと．

**松原**——私はトルコで15カ月近く，1つのテントに居候したのですが，「いつまでいるのか」なんて一切訊かれない(笑)．その間，私の家内や娘たち，私が前にいたトルコの村の連中が入れ替わり立ち替わり来るのだけれども，その人たちにも「いつ帰るのか」とか一切訊かない．これは別に遊牧民だけでなく，ユーラシアの中での生き方の1つの知恵だろうと思います．長い時間のなかでは，訪れた人がいつか迎え入れる役割をになうサイクルが存在することを確信しているわけです．

**小長谷**——私がゲルに住んでいたとき，お客さんが来てお茶を出して，何も会話がなく帰って行ったから，あとで「あれ，誰？」って訊いたら，「知らん」(笑)．「何で訊かへんの」って言っても，「名乗らへんもん」っていう感じです．もてなしに関しては，明日はわが身というのもあるかもしれないけれども，誰もが水平な関係だとすごく感じました．大地が水平的に広がっているように，人間も水平的な関係があるのかも……．

**日高**——僕もそう感じましたね．「あっち」「あっち」といわれてずっと行く．10 kmも20 kmも行くと，ポッと1つゲルがある．そこへ入っていくんです．

**小長谷**——突然ですよね．いつでもアポなし(笑)．

**日高**——入って挨拶すると，羊の肉やお茶やミルクを出してくれる．ある所では一生懸命謝っている．「さっき大勢お客が来て，食べ物がなくなっちゃってごめんなさい」って．いきなり来た人に，そう言うなんて，不思議な所だなあと思ったの．

モンゴルらしい草原にいたのは往復の2日を含めて4日だけで，1週間以上，ウランバートルにいたんです．都会ですから，日本とほとんど変わりない．トロリーバスも車もいっぱい走ってる．ところが草原はそんなで，「これがいつまで続くのかな」と思ったね．

**安成**——当然，モンゴル人同士，遊牧民同士も，そういう交流をしているわけですよね．

**小長谷**——そうですね．本当は嫌なんですよ，ずっと居候されたら．自然災害が起こったりしたら，自分の利害とかち合う．だけど，拒絶はできないです．次にいつ自分がそういう身分になるか，わからないから．

### 遊牧と土地所有

**安成**——最近，ウランバートルを中心に一部土地の私有制が始まっています．そうなるとこれまでの世界と全く対立するわけですよね．

**松原**——遊牧の未来に関しても，環境立国にとっても，土地の私有制は非常に大きな問題です．資本主義勢力である世界銀行，IMF，アジア開発銀行などの圧力は，強力なものがある．開発の借款を出す条件として，土地を私有化して借款の担保にすべきだという主張です．ここが一番肝心な所だと思います．土地に値段をつけてどんどん経済を拡大していく中で，日本は土地バブルを経験して，極限を見たわけです．モンゴルはこの正反対にある．この正反対の生き方を持続させる仕掛を考えるべきだということです．さて，どうしたらできるかが難しい所です．

**小長谷**——先日，土地法に関する勉強会をしたんですけれども，銀行側の論理では「コモンズの悲劇」がキーワードです．共有地であることがいい加減な利用を生んで環境破壊になるから私有化だと．本当のコモンズの悲劇は，そういう意味ではない．言葉だけが勝手に一人歩きして，ましてや金貸し屋さんが使う時は，世界中で，担保を取るために土地の私有化を進める言葉になってしまっている．

**安成**——モンゴルはコモンズの悲劇がなかった唯一の国では……．

**小長谷**——それを証明しなくちゃいけないですね．

**松原**——遊牧の暮らしは，基本的に土地を私有化しない，所有権を申し立てない，という原理によって成立している．

**小長谷**——生活が成り立つと同時に，環境を維持しつづけている．コモンズの悲劇とは，無規範な利用はいけないということであって，入会地のようなものまで否定しているわけではない．いまのモンゴルでは，私有化したら逆に無規範になってしまいます．

**日高**——この間，品川哲彦さんという関西大学の哲学の先生と話した．『思想』に「環境・所有・倫理」という論文を書いた人で，哲学の人が環境を論ずると，なぜみんな環境倫理学になるかわかりました．「環境の問題は誰がどう所有するかの問題である．きちんとした所有をすべきとなると，それは倫理の問題だ」というので，なるほどと．モンゴルでは，共有という形で所有していて，倫理的にもきちんとしている．

**小長谷**——皆で決めた規則があったりして．

**日高**——駄目な共有地の悲劇にはそれがない．結局，人間が制約を作るのは，それがないと非常に不利なことが起こるという場合ですよね．モンゴルでは，制約のない駄目なコモンズはあまりなかったのかな？

**小長谷**——これまでは．各人はそんなに倫理的ではないかもしれないけれど，生き方自体が1つの倫理としてあった．ヒツジなんて毎日1頭ずつ食われへんでしょう？(笑)そんなに富をもっても仕方がない．

**原山**——でもそれは定着・農耕という原理から見ると，松原先生が言われた，ソ連による遊牧の完全な圧殺のような歴史の積み重ねです．中華帝国からもずっと圧力がかけられて，内蒙古ではそれが大変極端な形で，既に清朝の末期から出ています．すると，遊牧を維持するためにやっていた様々の工夫ができなくなるという結果をまねきました．その延長線上に，先ほどの様々な国際機関からの圧力の話があるような気がしました．遊牧民のもっている価値観と全く違う．

**小長谷**——生活と価値観に対して無理解な中国やソ連に圧迫されてきたのが，今は3大国際金融機関に……．

**日高**——敵は変わったけど，やられていることは同じ．

**小長谷**——物でなく，金でつられている点が違うだけ．

**日高**——アフリカではとにかく土地をめぐって絶えず戦いがありますが，あれは，人口が多いからかなぁ．

**松原**——人口密度の問題は確かにかかわりがある．もともと遊牧で暮らしてきた空間は非常に広大です．ところが，そこを近代国家の制度にもとづいて線引きをしてしまうと，遊牧の生きる空間がなくなってしまうわけです．

トルコでは1930年代に土地の登記が全国的に行われます．遊牧民は，そこで移動しながら数百年間暮らしてきて，自分たちの生活の場という認識はある．しかし，登記という観念は一切ない．その土地を農民側が全部登記してしまったため，遊牧生活を持続することが難しくなる．

モンゴルで起こりつつあるのも全く同じだと思いますし，もっと悲惨なことになる可能性が高い．モンゴルでも，土地を私有化すべきと思う人が増えて，去年(2002年)の6月に法案が国会で通ってしまったわけです．モンゴルの人の意識も変ってきている．それを前提として，どうしたら遊牧という地球上でも稀な生き方ができる空間が維持できるか．先日の研究会では小長谷さんが，土地私有化法を逆手にとって，どんどん放牧地を買い取って全体をナショナルトラスト化するという案を出されました．

**小長谷**——遊牧の空間を私有化しないで法的に守ることができればいいんだけれど，法律も信用できない．

### 豊かな草原を支える自前のシステム

**安成**——僕は，モンゴルの対比として，僕自身も経験

したネパールの高地・山地民族の環境問題を考えます．あそこは農耕もやっていますが，一応遊牧の形態をとっている．そして，やはり環境が問題になっている．

1つは，彼らが生きるために薪を取ることにあります．非常に限界の所で植生があるんですね．

**小長谷**——薪を取ると限界を少し超えてしまう．

**安成**——そこは欧米のエコツアーの対象になっていて，いわゆるエコロジストが「木を守れ」という．特に，エベレスト初登頂のヒラリーが音頭を取って財団を作り，国立公園化したので，一時非常に大きな問題になりました．国立公園にして自然を守ることは，ネパール政府も同意したんですが，住民が木を切ることも禁止したので，「ちょっと待てよ」となったんです．

住民が何らかの形で環境を変えるのは確かです．ネパールの場合，それを抑える，つまり木を切らないためには，近代化して電化する，となった．私の仲間が活動して，水力発電で村に電気をつけました．それは日本の緑が明治以降守られたのと同じかもしれません．

しかしモンゴルの場合は，松原さんが言われたように，遊牧は自然と一体となった1つのシステムです．モンゴルの草原生態系はかなり恵まれている．人口圧の低さもあって，あの広さで何世紀か成り立ってきたわけです．しかし，システムもスケールもかなり大きいので，今の形で残すのは相当厳しいのでは……．

**日高**——恵まれた草原とは，どういう意味ですか．

**安成**——草原のすぐ横に森林もありますね．ゴビは乾燥して厳しい環境ですが，かなりの遊牧民がいる森林ステップからハンガイのあたりは豊かです．

**松原**——ユーラシアの東から西へずっと遊牧の暮らしを見ていくと，特に夏は，東から西へと極端に草原の豊かさが減っていきます．トルコのトロス山脈と，モンゴルでは雲泥の差です．モンゴルやアルタイ，天山山脈の中の草原は豊かですね．

**小長谷**——アフリカから国際機関の人がモンゴルに来て「家畜の管理がなってない」となじるんです．彼らはぎりぎりの環境で生きてきたから，モンゴル人は何もマネジメントしていないように見える．言い換えれば，何もそんなに細かい戦術をとらなくても，豊かに暮らせる所なんだと思います．

**日高**——モンゴルはアフリカよりずっと豊かなのかな．

**小長谷**——牧畜民のいる所の平均降水量は全く違う．

**安成**——最近のわれわれの研究でアフリカとモンゴルのちがいが見えてきた．西アフリカのモンスーン地域は，内陸へ行くにしたがってより乾燥になっていて，旱魃で有名になったサヘルは，夏にのみ雨が降る．その水がどこからくるか調べると，大西洋，海から入るのが大部分なんです．

一方，モンゴルでは，大部分は大地の植生からの蒸発散です．草原からの草いきれですね．それが雲を作り，また雨となって降ってくる．

**松原**——自前なんですね．

**安成**——自前の部分が降水量の90％以上を占めます．冬から春はある程度雪が降って，それが溶けてまず最初の水になるし，夏にも多少は他から入ってきます．降水量そのものは決して多くないんですが，リサイクリングしている割合が大きい．それには草原そのものが大きな役割を果たしているようだと，見えてきているんです．

**小長谷**——逆にいうと，地表をはがしたら……．

**安成**——まさにゴビみたいになる．

**小長谷**——はげてきたら，とめどもなくはげる．

**安成**——そういうフィードバックの可能性もあります．

**日高**——それは中国の場合と同じだね．

**安成**——黄河の黄土高原もいまははげちょろけですが，昔はけっこう木も草もあった．いったんはがすと……．

**日高**——もう植えても生えない．

**安成**——今，内モンゴルはどんどん砂漠気候が拡大しているんです．植林をしているけど，元に戻るかどうかわかりません．

モンゴルはそういう形でギリギリ成り立っているんだと思います．西アフリカのサヘルの大旱魃は，過放牧が原因という説もあったんですが，大西洋の高気圧の大きな変動で，モンスーンの風がこなくなったためとわかりました．近年はまた少し回復している．すなわち大気・海洋系を含めた大きな気候変動が原因だったわけです．モンゴルの場合は，しかし自前のシステムで気候を形成維持している可能性がある．

**松原**——モンゴルの気候の自前のシステムは，それ自体非常に大事な財産だと思うのです．ユネスコで人類の文化遺産の登録制度をおこなっていますが，モンゴルの自然はまさに地球遺産です．

**安成**——文化遺産でもあるし，自然遺産でもある．

**松原**——そういう提言を自然科学者と一緒に主張する．それがこれからの学問の1つの役割ではないでしょうか．

## 新しい発想法を

**原山**——行政区画が上から突然降ってきて，豊かな環境のなかで自由にやりくりできていた遊牧の可能性を

どんどん縮めていけば，先細りするのは当然だと思います．それで遊牧には未来がない，もうやめようという方向にもって行こうとする話の進め方が問題です．「この場所を守る」「可能性を引き出す」という時は，定着や農耕以外の枠組みを適用した新しい発想をしないといけない．

**日高**——いまあるいくつかの可能性のうちのどれを選ぶか，では駄目なんですね．モンゴルでも，ネグデルが土地を変なふうに切ってだんだん遊牧ができなくなった．それでは嫌だと遊牧民が言って，自ら変えたのに，その体制が潰れてしまって，僕はかなりショックだった．

**小長谷**——遊牧民も変わらなければいけないと思います．以前のように，ノーマネジメントではできないんです．自然も長期的変動でどんどん変るし，自分がしたことの落とし前もある．ヤギが草地をはがしたとか．

一番大きいのは，人口だと思う．草原が養わなければならない人口が，昔とは全く違います．もっと意図的に，放牧の指導書でも書いて，やり直さないと．

国全体で遊牧をどう見るか再検討してもらいたい．今の政治的な流れは，自然に翻弄される遊牧はやめようという方向です．だけど，研究者はちゃんとわかっている．あんなにはかない自然に，一番長期的に対応できるのが遊牧だと．それは，歴史学者も文書から言える，自然科学者も数値で語れる．ここは皆で，夏ぐらいにウランバートルで会議をしませんか．

**安成**——もともと遊牧民で，今はウランバートルで政府の要職に就いている人がかなりいますよね．そういう人たちは，遊牧をどう思っているんでしょうか．話をしていてもよくわからない．本当は守りたいけど，今の趨勢としては，土地の私有制も含めて仕方がないという言い方を結構される．もう少し広い視野を持つ人がいてもいいと思うけど，そんな余裕はないのかな．

**小長谷**——ご本人が都会育ちか，田舎を持つかは雲泥の差ですね．故郷として特定の地域，風景を持つ人は，やはりそれが原点に違いない．ただ，そういう人でも，未来の発展は別の所にあると思っておられるんです．

ウランバートルの発展と地方の発展を並行して考える．それぞれの方策が同じか違うか分かりませんが，ともかく町と地方をつなげる発想があればと思うのですが，彼らの世界観では，全く別次元のようです．

**松原**——一番の問題は，社会主義時代に受けた，遊牧は絶滅すべきという教育が骨の髄まで染み込んでいることですね．「遊牧は非常に大事です」と言って歩くと，ほとんどの人は「そうだ．その通りだ」と口では言うけど，本気にはしてないところがあります．

**小長谷**——精神世界の原風景としての評価だけです．

**松原**——遊牧が歴史の中で大事な働きをしてきたことを評価し，遊牧側から見た歴史を書かなければならないと思います．この点は，原山さんたち歴史学者にも働いてもらわなければならない．

**小長谷**——唯一私が希望を感じるのは，今は環境を中心に世界を考える時代です．彼らの生活は，13世紀に書物に書かれたものとほとんど変わらない．誰がみても後れてるから，そう思わざるを得なかった．今は環境論の文脈の中で，変わらないことがどんなに難しいかわかってきました．持続可能，変わらないこと，これはものすごい努力の結果だという文明的な価値観の転換点にようやくきた．もっと皆で「後れてない」と言って，自信を取り戻してもらわないと．

**日高**——後れてない，と言ってもたぶん駄目なんです．

**松原**——そう，駄目です．

**日高**——ウランバートルと地方の両方で過ごして思ったのは，あまりにも違いすぎるということです．ヒツジを売るか何かでウランバートルにきた18歳ぐらいの女の子をたまたま見たんです．伝統的なヒツジの毛皮を着ているんですが，女の子が欲しそうな物ばかりが並んでる店に入ったら，そのときの彼女の目つきたるや，ものすごかった．偶然ビデオに写っていたその目つきは，今見直してもすごいです(笑)．たぶん彼女は帰りたくないと思ったでしょう．学生も国立大学に入ると戻らない．それは戻れないよ．夜は真っ暗で，テレビも何もない．町は夜でも電気は煌々として，ディスコもある．それはいくら口で説いても駄目なんだ．

**小長谷**——地方なりの楽しみを作れば……．同じ水準で勉強できる環境にするとか．

**日高**——今までも，社会主義も何もみんなそうやってきた．町では子どもが嫌がって「学校へ行きたくない」と言い，田舎では「学校を建ててくれ」と言う．結局，それと同じことをまたやるのかな．

**原山**——地方に均霑していくということは，要するに定住化で，特に教育はそれと切り離せないということになりますよね．

**松原**——ユーラシアの遊牧地帯は，歴史的に長い時間をかけて五畜を揃えて，豊かな生活ができるようになったという面があります．ただ，都市と地方の格差は埋めようがないと思う．今私たちがやろうとしているのは，ゲルで分散して暮らす人たちが，最低限，電気をつけ，テレビが見られる電源を確保することです．太陽光と風力のハイブリッドで，5万円ぐらいの装置

を開発しようとしています．それが確保できたら，ささやかだけれど，ゲルを足場に暮らそうという人も増える可能性はあるだろうと思います．遊牧生活を持続できる方策を，具体的に考えなければと思っています．

**日高**——アフリカの場合，とにかく定住というので，ビルみたいな団地を造って，そこに住まわせる．ビルの中からマサイが出てくる(笑)．どうも不思議なんだな．それではたぶんうまくいってないでしょう．

**松原**——非常に不幸ですね．

**原山**——2100年ぐらい前，中国の漢に中行説という人がいて，匈奴に漢から送る公主，これは漢から匈奴の王である単于(ぜんう)に嫁がされるお姫様ですが，それについて行けと言われて，「嫌だ」と言ったんですね．でも，無理にやられたから，着いたとたん匈奴に寝返りました．そして，色々な忠告をするんです．中国からもたらされる綺麗な着物に憧れているけれども，そんなものはここではすぐに破れてしまうし，ここには立派な食べ物だってある．これでいくのが一番いいんだと，単于に助言します．司馬遷の『史記』にある非常に有名な話です．

中華文明と対峙していた時は，嫌でもそれに傾斜した．今はウランバートルと草原地帯で同じ話が起こっている．そういう歴史をみると，心のもちようがすごく大きいと…….

**小長谷**——私たちは現代の中行説になれと？

**原山**——いやいや，そのような観点からの助言の有効性がはたしてあるだろうか，とさえ思ってしまうんです．日高先生が言われたように，ウランバートルに現にあるまぶしいばかりの物質文明を，駄目よと言っても誰も聞かないと思うんです．

**日高**——老人はともかく，若い子は絶対駄目だと思う．

**原山**——意識を変えるのは，並大抵のことではない．

**松原**——もともと遊牧社会では物質的欲望は大きくなかった．それにもとづいて，透明感という印象を持ったわけです．しかし実際には，テントで一緒に暮らしていた子どもと町のバザールに行けば，彼らは目をキラキラと輝かします．まず見たいのはテレビです．それを止めるのは本当に難しい．

われわれは，遊牧生活をいわゆる伝統的な形で持続すべきだと言っているのではなく，モンゴルという類稀な空間で，遊牧の暮らしのエッセンスが持続できる仕組みをつくる必要があるということを言っているわけです．それは，環境の問題とも完全に密着している．かなり絶望的な所はあるけれども，研究者側から，働きかけていく必要はあると思います．



**安成**——環境の問題は，「こうせなあかん」という気持ちでは絶対にうまくいかないですね．日本でも色々な矛盾が出てきている．町に住むのはいいこともある一方，大気や水の汚染がある．それで田舎へ行くと，今でも綺麗な水が流れていて，「ええなあ．やっぱり，これを守らないかんな」と，思うわけですよね．

モンゴルでも，ウランバートルは確かにきらびやかな物質文明かもしれませんが，衛生問題など色々起こっている．やはり草原でウマでも駆ってるほうがええやないか，という文化がないとうまくいかない．夜になったら真っ暗でラジオ以外何もないのを…….

**松原**——ラジオもないところもあります．

**安成**——あまりないですね．でもこの頃はテレビや車，発電機を使う人が結構います．少し幻滅なんですけど．

松原さんの言われた，風力や太陽光は使うけれどエッセンスは守るという考えは，日本でもモンゴルでも環境問題の解決にとっては大事だと思うんです．『21世紀は江戸時代』という本もあるように，江戸時代は物質循環のいい世界だった．でも江戸時代には戻れないから，新しい持続可能な世界を創る．モンゴルにもそうあってほしいと思います．

米本昌平さんがよく言っていますが，「温暖化なんてほんまかいな」と思っていても，そのために備えること自体は決して悪くない．軍拡や戦争だったら，技術は発展しても，結局悪いものが残ります．環境問題なら，本当に温暖化するかもしれないし，リサイクルできる社会を創ることは全く悪くない．環境問題にはそういう面があると思います．

1970年代に車の排気ガスの問題で，環境庁が「今のエンジンはみんな駄目だ」と大規制した．トヨタをはじめ無理だと言っていたけれど，ホンダがクリアしたら，結局どこもできて，おかげで日本は東南アジアや中国に比べれば，はるかに都市の大気はよくなりました．そういう行政の力もある意味大事だと思います．モンゴルの場合も，政府がどんな政策を取るかは非常に効く．土地私有制は負の可能性が高いと思いますね．

**小長谷**——牧草地は私有しないことになっているのですが，何をもって牧地とするか，地図で決まっているわけではなく，拡大解釈がいくらでもできる．いったん開いたら，すぐ大変なことになると思います．

**日高**——昔はホルショーという協同組合を通してウランバートルに持って行って売っていた．今はむこうから車でバーッとやってきて買ってくれる．そして積んできたキラキラしたものを見せるので，もらったお金ですぐにそれを買ってしまう．ホルショーなんか要ら

なくなっちゃった．昔はどこの国でも協同組合があったのですが，たいていうまくいってない．それとは違う論理を呈示しないといけないわけですが，うまく出せるのかなあと思う．できる気もするけれど，遊牧の楽しさや美しさでは駄目じゃないかと……．

**原山**——遊牧の楽しさと資本主義とが「カシミアでこんなに儲けた．こんな可能性があった」という形で結びついて発露しているように感じるんです．

**日高**——儲かるとなると，政府としても国全体の総生産があがるからそれでいい，となる．遊牧はモンゴルがここまでくる間の基幹産業だったけれども，これから生きていくためには，それだけでは駄目だと大使が言っていた．そうなると，やはり工業とか農業とかいう話になってしまうけれども，そういう，今までの次元の話ではなく，もう1つボン！ と新しい発想を打ち出せないか．

## モンゴルと日本の未来

**小長谷**——古いようにみえる遊牧は，しかし，長期的に生き抜く方法として安定している．遊牧は21世紀型で，分散型の社会であることも含めて新しいと言いたい．20世紀のインフラには不利でしたけど，いまは携帯電話にしてもみんな分散型です．分散して生きることで，環境にもうまく適応して，長期的な変動に最も有効に耐えぬく最先端の社会だと．

**安成**——文化と自然も遊牧のおかげで維持できている．

**小長谷**——借款を与える代わりに，よくぞ地球のために遊牧をお守り下さいました，地球賞を差し上げましょう，と表彰される世の中になれば……．

**松原**——やはりそれは，地球遺産です．

**日高**——遺産になっちゃいかんが……(笑)．

**松原**——遊牧民と暮らしていると本当にさわやかです．彼らも常に言っているけれども，1つの場所にへばりついていない．「自由」という概念の基盤には，その部分が大きく働いている．この移動という原理から学ぶことが可能です．

歴史的な遊牧を，その移動性も含めて，全面的に確保するのは難しいと思います．しかし，私は自由な生き方に遊牧の魅力を感じますし，同じように感じる人が少しずつでも出てくる可能性はあると思っています．

**安成**——モンゴルの遊牧民の子どもは，日本にはまずいない，いい顔をしていますよね．生き生きとして．

**小長谷**——顔は似ていても，放つ光の量が違う．

**安成**——高度経済成長の前の日本の農村にも，そんな顔の子どもがたくさんいた．モンゴルへ行くとなんとなく懐かしいのは，それもあると思うんです．ほんとに生き生きしている．それは，松原さんが言われた生き方が関係していると思います．

**日高**——モンゴルでは，草原から出る水蒸気が雨になって落ちて，水が再循環して回っている．熱帯降雨林に似た所があるのかな．熱帯降雨林は，木を切るとメチャクチャになるんですよね．

**安成**——アマゾンがそうです．

**日高**——アマゾンでの「木を切るな」が，モンゴルでは「畑にするな」ということでしょうか？ 林や畑にしたらいけない．結局，遊牧が大事．それによってこの土地が残って，まさに持続可能に生きていける．

農業は少しでもやれば少しは獲れて，人を少しよけいに養える．でも，増えた人を食わせるには，農業を拡大しなきゃいけない．これが悲惨なことになるわけです．農業を始めると拡大を続けなきゃいけない．

**小長谷**——拡大の連鎖，欲望の連鎖ですね．

**日高**——遊牧は，そうじゃないんだよね．

**小長谷**——雨の源が草の海なんだという視点が出ることで，遊牧を守らなければウランバートルに住んでいる君たちの明日もない，とわかる．そこを訴えれば，精神的な原風景ではなく，実質的に環境として守るべき存在だと……．

**安成**——結局，そこがポイントじゃないでしょうか．

**松原**——土地の私有化は，あっという間に自分の足元を掘り崩してしまう．

**小長谷**——自分だけが利益を得ようと動いたら，自然の刃が刺さる．脆弱な環境ですから，一度ガンが発症したらまたたく間に死に至ると思います．

**日高**——日本も似たようなもんです．脆弱ですよ．

**安成**——日本は大量の水の輸入国だということが今問題になっている．virtual water です．輸入食物を作るのには大量の水を使っていて，それを輸入している．

**松原**——黄河の水まで干してしまったわけです．

**安成**——極端に言えば，日本の物質文明は世界のどこかを枯らしながら栄華を築いている．日本は水からも気候からも，国内の農産物だけで，今の1億人ぐらいは十分食えるはずなんです．使い方の問題ですよね．

今は，どんどん輸入しないと，市場経済が維持できないと言われている．経済がとことん悪くなっている現代は，経済システムを根本から変えるいいチャンスだと僕は思ってるんです．

(2003年1月京都にて)